

コスタリカ協力隊の父と母～初代隊員（フィリピン）とメキシコ日系二世～

岩澤治雄さんは1965年度派遣、日本青年海外協力隊の初代隊員。

岩澤文枝さんは、1940年8月29日メキシコ国ソノラ州に生まれた日系二世。

お二人が「コスタリカ青年海外協力隊の父と母」と呼ばれるようになった物語だ。

治雄さんは、1935年2月25日山形県生。両親と共に満州ハルビンに渡る。1946年敗戦と共に、母に連れられて佐世保港に帰国。港で食べたおにぎりがとっても美味しかったことが忘れられない。山形の農業高校を出て、1963年米国に農業研修に出向く。2年間。ここで農業の実践と英語を身に着けた。

1965年9月、帰国して間もなく日本青年海外協力隊の公募が始まる。応募者463名の内、50名が合格した。翌月10月から2か月間の派遣前訓練。1966年2月22日、1965年度フィリピン派遣1次隊12人が、初代隊員としてフィリピン着任した。第一次隊は、農業を主とする地域開発を目的とし、北部ルソン島のマウンテン州に集中して派遣された。治雄さんの指導職種は「園芸作物」。園芸作物3人、農民組織2人、土木施工3人、竹工芸2人、稲作2人の内の一人だった。

同年1966年9月、来日されたマルコスフィリピン大統領と佐藤栄作総理大臣は、「日本青年海外協力隊がフィリピンの地域開発に貢献するとともに、日比両国青年間の相互理解及び親善の増進に寄与していることを認め、今後更に他の分野においても協力隊の派遣が望ましい旨合意をみた。」との共同声明を行った。フィリピン派遣1次隊、2次隊の献身的な活動の成果や地域住民からの信頼が、この共同声明以降大量の派遣要請となり、フィリピン全土に隊員が派遣される起爆剤ともなった。

治雄さんは、展示果樹を作り、種まき、管理、収穫作業の指導の他、食生活における野菜利用の重要性について啓発活動を行った。病虫害や盗難に悩まされつつも地道な活動を続け、在来種の改良と人気のある日本種の紹介普及を推進した。1968年帰国。

その後、北興化学入社。1970年頃からコスタリカを始め中南米諸国に同社の農薬カスミンを販売していた。フィリピンでは英語やタガログ語が主として使われているが、300年間統治したスペインの影響も濃く、スペイン語も使われていたことが、中南米での営業に役だった。

1972年から同社の駐在員としてコスタリカ駐在。その後、毎月のように中南米諸国を縦横無尽に渡り歩いた。

文枝さんの両親は、広島県から1936年頃メキシコの米国との国境、北部のソノラ州で写真屋を開業。1940年文枝さんが日系人二世として生まれ、2歳でグアダハラハラに移

る。1974年にコスタリカで暮らし始めた。1975年コスタリカで治雄さんと文枝さんは結婚された。

コスタリカでの初代隊員4名は1974年10月派遣された。職種は柔道、水泳、体操競技、体育だ。当初は事務所もなく、協力隊調整員も駐在しておらず、エルサルバドルから出張して隊員活動を支援していた。

こうした状況で、まさに陰に日向に、若き協力隊員の活動へのアドバイスや愚痴の聞き役に回ったのが治雄さん、文枝さんだった。時には夜通し、朝まで話し込むこともあった。協力隊員が首都に出てくる際に寝泊まりに使う隊員連絡所も当時はなかったことから、赴任時歓迎会や帰国時送別会も岩澤家で開かれた。庭でごぼうなどを栽培し、みそ、納豆は手作りだった。日本食材や日本料理は、文枝さんの母親がメキシコで作られていたのを見よう見まねで学んでいたことが役だった。年末近くになると、餅つき大会も開かれた。当初はコスタリカの木で臼を作ったが、日本の木材より木の劣化が早く、もち米が臼の木の間に入ってしまう。見かねて、日本から臼は取り寄せたが、高地のサンホセでは乾燥のため、木が裂け、何度か日本から取り寄せなければならなかった。

文枝さんが母のお見舞いにメキシコに戻った時には、その近くの病院に任国外で滞在していたコスタリカの隊員が入院していると聞いた。急いで駆けつけると、やつれはてた姿だったが、文枝さんが作ったお握りをむしゃむしゃ、たちどころに回復したこともあった。

岩澤家の次男 昭文さんは、協力隊員に囲まれて育った。岩澤家では、「日本食を食べればみんな元気になるから」をモットーにいつどの隊員が家に来てもいいように大きな鍋で煮込みや日本食を作って待っていたのだ。昭文さんは、協力隊員から、未だ見たことがない日本のことを聞いたり、将来の進路等の相談にのってもらい、いつしか隊員が実のお兄さん、お姉さんの存在になっていった。コスタリカの中学校([サンホセ日本人学校/コスタリカ日本人会](#))を卒業後、高校からは、親元を離れ、日本に行った。近くに親戚はいなかったものの、帰国していたコスタリカ隊員OV達の自宅に頻繁に呼ばれ、多くの励ましを受けた。今なお、鹿児島で当時の隊員達との関係が続いている。

岩澤家の長女的美智枝さん、双子の三女すみれさんはそれぞれ、JICAの国内センターで勤務され、双子の次女はるえさんはメキシコで歯科医をされている。

1974年コスタリカ協力隊が派遣された頃、ご夫妻は隊員にとって兄貴分、姉貴分だったが、いつしか、父親役、母親役となっていった。時には、帰国後のコスタリカ人との国際結婚の相談を受けたり、あるいは隊員の親が来られて、「本当に結婚しても大丈夫だろうか」等々相談にのることも一度や二度ではなかった。

時折、日本に戻られた。沖縄の通りを歩いていると、「お母さ〜ん」と呼びかけられたりもした。全国各地に「子供」がいる。

2002年、治雄さんは、業務の傍ら研究も行い、コスタリカ大学の研究者と共に、コーヒーの病害に関わる論文「[コーヒー木部の細菌の存在](#)」も執筆されている。

2016年、治雄さんは「青年海外協力隊の父」としての長年、コスタリカの隊員活動を陰で支えた偉業を称えられ、外務大臣表彰を受けられた。お世話になった多くの現役隊員、かつての隊員がその受賞を喜んだ。

[岩澤治雄氏への外務大臣表彰伝達式の開催 \(emb-japan.go.jp\)](#)

2022年、一時帰国中の治雄さんは日本で病に倒れた。今では全国各地の隊員OVが山形にお墓参りをしている。

2024年8月30日、[JICA コスタリカ協力50周年式典](#)。同年10月5日[コスタリカ日本人学校開校50周年式典](#)。そのいずれの式典でも文枝さんは招待され、かつての協力隊員から、また文部科学省派遣教師、50年前に卒業したかつての小学生等々多くの方と旧交を温められていた。

国際協力、青年海外協力隊、はこうした方々の善意に支えられている。

文責 吉田憲（写真は文枝さん/昭文さんから拝借したもの）



1966年2月フィリピン派遣
第一陣 羽田空港でのタラップ
最下段が岩澤治雄さん



フィリピン ルソン島 (左)



フィリピンでのワークショップの参加者と (前列右から3番目)



協力隊のパイオニアたち 1965年初代隊員派遣前訓練（後列右から3番目）



メキシコ仕込みの焼肉を隊員
達にふるまう文枝さん



日本人学校の運動会で隊員と共に（左から3人目が文枝さん。左端は[菊池格夫](#)隊員）



2016年文枝さんの誕生日に隊員達が集う。前列左端は[半谷良三](#) JICA コスタリカ所長（当時）



業務の傍ら常にご専門の農業研究を怠らなかつた治雄さんの書棚



2017年 コスタリカ青年海外協力隊員総会懇親会場でのご夫婦